

# 「試論」日本人の起源

日本語を話す弥生人は何処から来たのか？  
日本語 倭人 弥生人 徐福

(2008年9月改定  
2005年5月初稿)  
丸地三郎

## 日本人の源流はどこ？

「日本人がどこから来たのか？」

日本語はウラル・アルタイ系と言われるが、近隣のシベリヤ・韓国・中国・モンゴル・台湾の言語系とは異なる。

アイヌ語とも異なり、日本語に類似した言語は無いと云われて来た。

その一方で、日本語各単語の発音の根底は南方のインドネシア・ポリネシアなどの体系にあるとも。

ブータンの着物との類似、中国雲南地方との納豆文化の類似など、単発的な風習や単語の類似から、南方から原始日本人は来たとの説も頷ける。

諸説あるが、信ずるに足りる論拠に欠けているように思え、「日本人の源流」は、謎のままであった。

この疑問を解く材料が最近の研究から生まれてきた。

― DNA分析を含む、近代科学の研究。

― 比較言語学が極めて面白い「真理」を導きだした。

― 民族学の研究成果

― 歴史の研究

科学と言語学と民族学と歴史の成果を総合していくと、今まで考えられもしなかった一つの道筋が生まれてきた。

この道筋を一つのアイデアとして、記して行きます。

壮大な「日本人と日本語のルーツ探し」の試論になります。

# 1 - 現在判明している日本人の人種的系統

- 現代人の特徴・地域分布

- 北九州から近畿地方を中心に、面長・扁平な顔立ちの人の割合が高い。（一般的に渡来系と云われる）
- 関東から東の地域には巾広の彫の深い顔の人の割合が高い。（在来系・日本古来の民と見られる。）
- アイヌ人と沖縄の人は類似している。在来系・日本古来からの民の血の濃い人達。

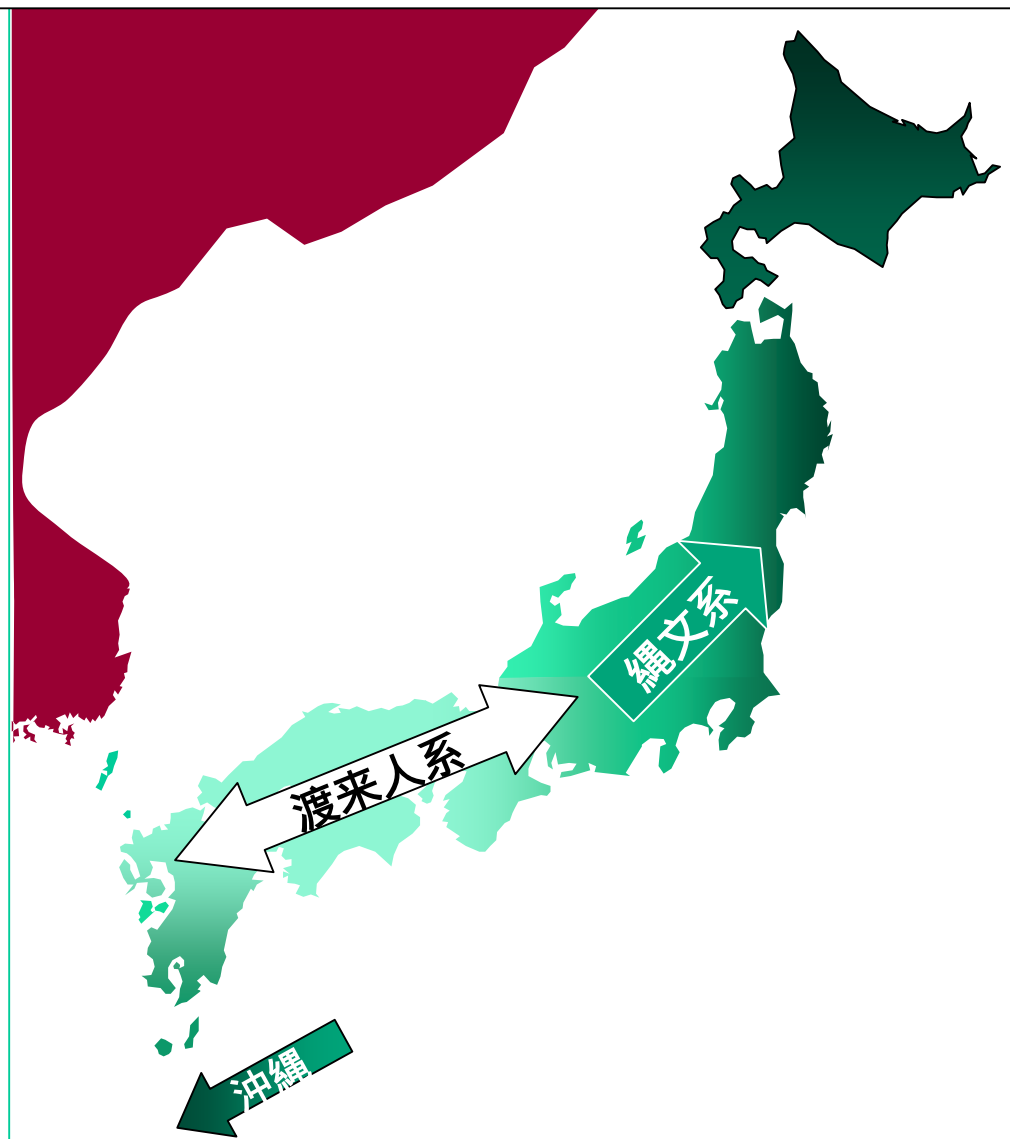
- DN 鑑定：、アイヌ人と沖縄人は極めて近い。飼犬のアイヌ犬と琉球犬も同様。

- DNA鑑定では、九州人・近畿人より関東の方がアイヌ人・沖縄人に近い。

- アイヌ人・沖縄人

- 元から広く日本全体に住んでいた人種では？
- それは、日本に広く分布が確認される縄文人？
- 何語を話していた？ アイヌ人の親、その祖先は、何語を話していたか？ 勿論、アイヌ語。
- 沖縄では、アイヌ語は残っているか？
- 何らかの事情があり残らなかつたものと想定。（大野晋著「日本語の起源」の中に記された宮古諸島の言葉の項がその間の事情を想起させる。

# 1 - 日本人の人種的系統 (現代も残る地域差)



# 1 - 母国語が変わること

・ 縄文人は

- ｜ 狩猟だけでなく・広義の農業を行っていた。粟、陸稻
- ｜ 三内丸山遺跡の大集落、巾広い交易活動
- ｜ 日本国中に広く居住していた。
- ｜ 勿論、独自の言語を持っていた。

・ 渡来人は

- ｜ 縄文人を皆殺しにして侵略をしたのか？
- ｜ 渡来人と縄文人は混血をかさねた
- ｜ 弥生人は、渡来人と縄文人の混血

・ 弥生人は、何語を話していた？

- ｜ 日本語を話していた。
- ｜ 渡来人は何語を話していた？
- ｜ 日本語を話していた。

・ 渡来人の言葉が、一般的な言語になる状況は？

- ｜ 渡来人は、小人数で、来て、縄文人の中に交じって、言語をかえた？
- ｜ 縄文人は自発的に言葉を変えた？

「母国語を自発的に捨てる」 そんなことは起りえない。  
洋の東西の歴史でありえないこと。

- ｜ 渡来人は圧倒的な武力と人数で縄文人を圧倒し、支配したはず。

・ 渡来人は誰？ 何処から来た？ いつ頃日本に来た？

# 日本語の起源

1 -

大野晋著「日本語の起源」 新版 岩波新書を読んで驚いたこと、理解したことを記す。

比較言語学の観点から著者は日本語の起源を探り続けたこと。

ウルラル Алтай系とされるが、日本語と同類の言語が見当たらない。

ウルル系の言語・蒙古語・中国語・朝鮮語・アイヌ語も同類の言葉ではない。

・ 単語レベルでも類似性がない。

・ 単語レベルで類似性があるのは、韓国語で約四百語が類似。(ここで言う韓国語は伽耶系語―伽耶は韓国南部で対馬の対岸―丸地の注記)

日本語と南インドのタミル語は同系統の言語であること。

・ 単語レベルの相似 ・ 稲作・米・畠・田んぼ・畦・墓・舟・機織・反など

・ 文法・五七五の詩歌の形体の相似

・ 生活・風習・墓制などの相似

・ タミル語は、ドラヴィダ語族の4つの言語の一つ、タミル語を話す人口は五千万人、位置は南インドからスリランカの北半分

日本語・日本文明とタミル語・タミル文明は同一起源を持つことが明確に証明されている。

・ タミルはBC1000年からの文明

・ タミル語サンガム(日本の万葉集に比せられ歌集はBC200年からAC200年に成立)

大野晋さんのもう一つの結論

・ 南インドのタミル人が、海路、日本に来て、日本語と日本文明を伝えた。

・ この結論は、どうも納得が行かない。

・ 生活、風習、稲作、米、金属文明など、類似点の指摘は見事だが、この結論には無理が有る。

\* 意見：・同一民族が、東西に別れ、一方は西南のインド・タミルへ他方は東の海上の日本に来たと判断するのが妥当では？

## 2 - 倭人・長江文明 「概要」

倭人と呼ばれる民族は、中国・揚子江（長江）に古くから居たことが記録されている。魏誌倭人伝などで日本人のことを倭人と称しているが、同じ名称が使われている。

この長江には古くから文明が存在した。

この文明に関しては、余り知られていない。

大阪教育大学の鳥越憲三郎さんの「倭族」と「長江文明」に関する多数の著書が記されている。

中国には、黄河をベースとした漢民族の「黄河文明」の外に、揚子江（長江）をベースとした「長江文明」が存在した。

黄河文明は中国の北にあり、長江（揚子江）は南にある。「南舟北馬」の言葉が示すように、主要な交通手段に違いがある。

黄河文明は「粟・麦」の文明、長江文明は「稻・稲作」の文明

長江文明の方が古い。BC7100年の遺跡が残る。

黄河文明は、BC2500年（龍山文化）

黄河文明は西域・更に北方のモンゴル地方の影響と圧力を受け、進化をとげた。

黄河文明が中国統一の過程で、長江文明を消滅させた。

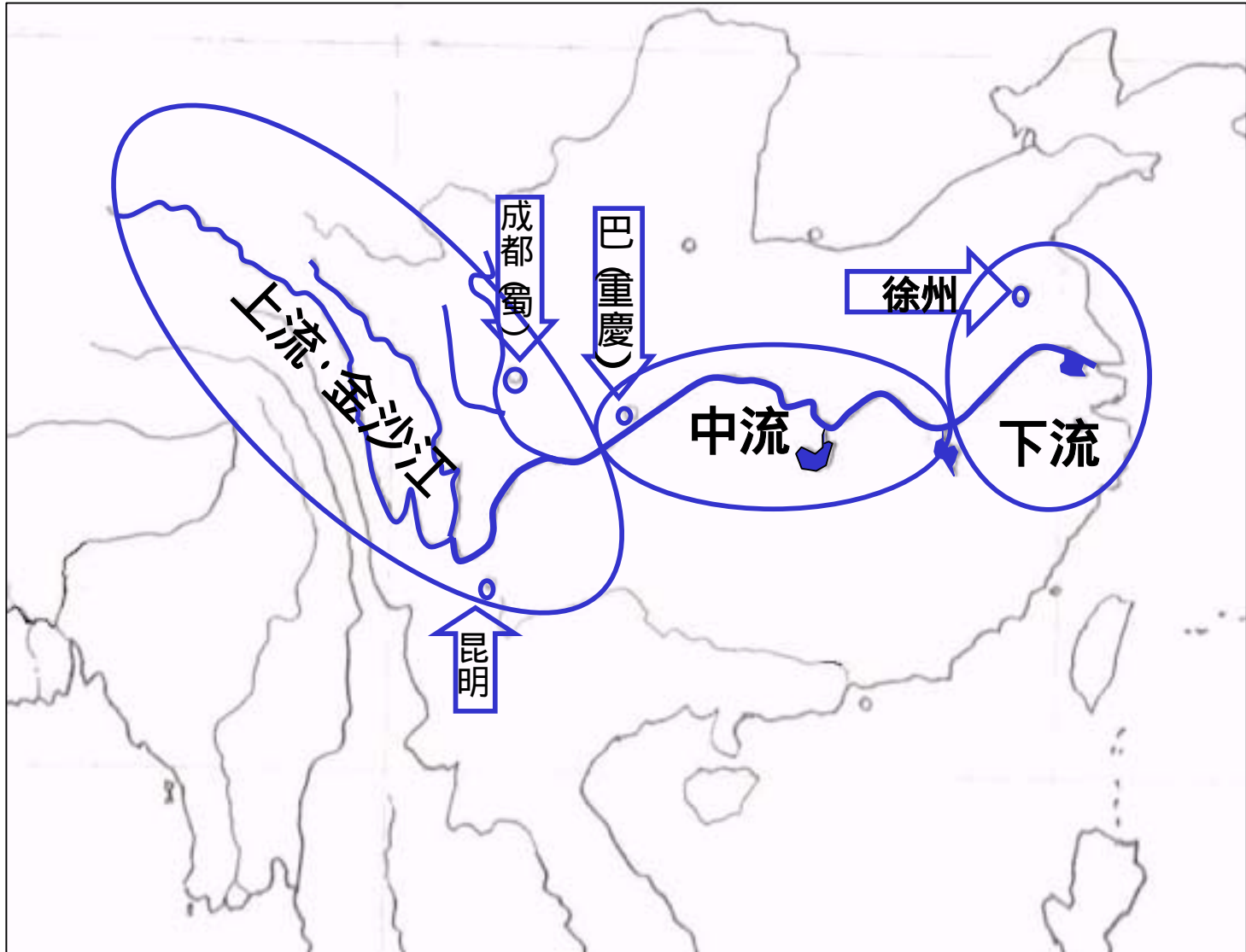
コメント 鳥越氏の定義する「倭人」長江文明の主要民族「にはやや疑問が残る。倭人は、「長江文明を担った一民族」と理解

長江文明についてまとめると、

中国文明は、南の長江文明と北の黄河文明が存在した。後から、地域を異にして生まれた黄河文明が、優勢になり、中国統一の過程で長江文明を滅ぼした。長江文明を担った倭人は、中国又はその周辺国家で、少数民族として、その文明の一端を残しているが、その他の多くは、黄河文明の潮の中に埋没した。

この知られざる長江文明について理解する為に次頁以降にまとめてみることにする。

## 2 - 長江文明・流域と都市





## 2 - 倭人・長江文明 地域と時代

### ・ 長江文明の地理情報に関して

長江の上流から下流まで、倭人の文明と歴史と民族の跡が残されている。

源流は、金沙江の名で呼ばれる。その流に沿って昆明、雲南省、重慶（成都）がある。

重慶から下流が長江と呼ばれる。重慶は四川省―蜀中流に洞庭湖、陶器で有名な景德鎮がある。

下流域は上海、遣唐使・遣隋使で有名な寧波があり、北の山東半島までの地域に長江文明の国が広がっていた。

長江から山東省までの間に、徐州がある。徐州は、徐夷と呼ばれ、倭人と言われる。（徐州はこのあとにも記す）

長江の上流、金沙江の流域に関しては、地図で別途説明。

### ・ 長江文明の遺跡と年代に関して

上流の四川盆地の重慶（成都）の北30kmの三星に三星堆遺跡がある。BC2800年。ユニークな青銅の仮面・像で有名。

昆明・雲南の青銅器。BC600年高床式・校倉作りの神殿と儀式。

中流・湖南省・彭頭山遺跡。BC7100年。稲籾

中流・湖南省・城頭山遺跡。BC4500年稲籾、木製の櫂、農具。周辺に多数の遺跡あり、発掘は進んでいない。

下流の良渚遺跡BC3260年。玉、管、珠。農耕文明。土器、穀物を盛る竹器

河口近く・河姆渡遺跡BC5000年・稲籾・稻茎・稻葉

・ 長江文明は、今から九千年前、BC七千年からの古い文明で、長江揚子江（の上流）最上流に広がり、下つては、河口から山東半島まで広がった文明。

## 倭人・長江文明

2 -

### ・ 長江文明の特徴

#### ― 稲作文明 . . . 黄河文明は粟の文明

- ・ 陸稲から水田耕作へ。
- ・ 水田耕作の新農業技術により収穫量が飛躍的に拡大。
- ・ 人口が拡大
- ・ 新規耕作地を求めて、生活地域の拡大
- ・ 土地領有の争いも拡大

#### ― 船舶・漁労

- ・ 漁労を得意とする。
- ・ 水上交通に優れる。(南船北馬の船の文明)

#### ― 技術

- ・ 青銅器・陶器
- ・ 鉄器
- ・ 木工技術・木工建造物・造船技術

#### ― 民俗・風習

- ・ 高床式住居、建築物
- ・ 木組み―木工技術
- ・ 鳥居―門の上に鳥が2羽
- ・ しめ縄
- ・ 収穫祭、生贄
- ・ 貫頭衣―織物 . . . (暑さ対策)
- ・ 文身・鯨面―刺青
- ・ 甕棺による埋葬

・ 魏誌倭人伝に記述された倭人の生活や、吉野ヶ里で発掘された遺跡と、長江文明とそれを担った倭人の文明は極めて類似。

## 2 - 長江の最上流

### 長江上流の倭人

重慶（成都）より上流を金沙江と云う。

この上流地域には、四川省・蜀・巴・徒・笮、雲南省・昆明・テン（サングイに真と書く）などの倭人国家が存在した。

ここには、横断山脈が南北に走る。約150kmの間に、東から、金沙江（長江）、ランツァン川（メコン川）、ヌー（タンウイン＝サルウイン川）プラマプトラ川の各上流部分が生かめきあっている、特別な地域。東から金沙江を下ると、武漢・上海で東シナ海に注ぐ。

ランツァン川（メコン川）を下ると、ラオス・カンボジア・ベトナムから南シナ海に注ぐ。

ヌー（タンウイン＝サルウイン川）を下ると、ビルマ（ミャンマー）・インド洋に注ぐ。

プラマプトラ川を下るとインド・ブータン・バングデイツシュに注ぐ。途中西に川を遡るとガンジス川からインド北部のヒンドスタン平原に遡る。

### 山岳越えのシルクロード

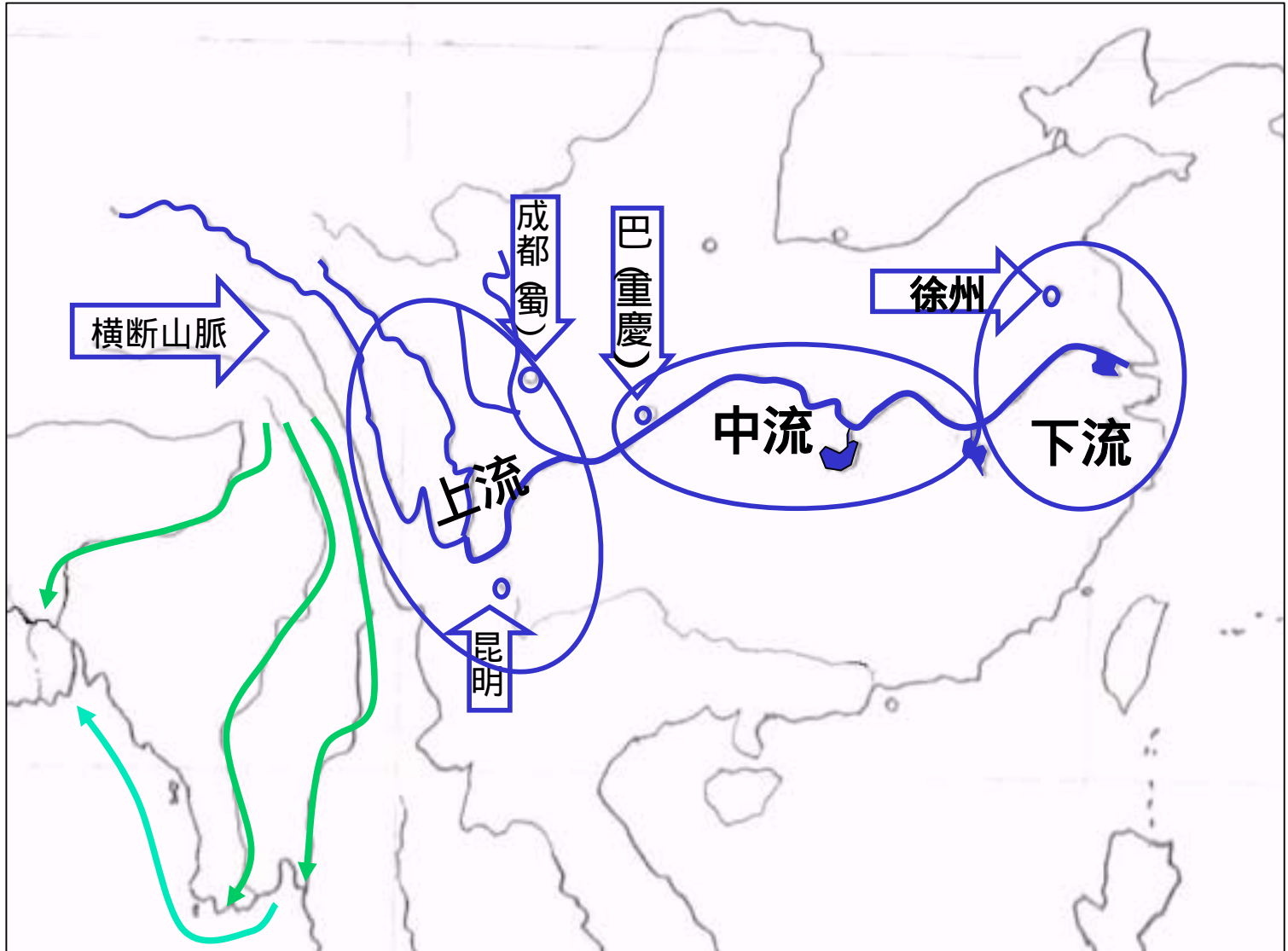
天山南路・北路で有名なシルクロード、インドから中国・杭州（上海の南）まで至る海のシルクロードが有名だが、**幻の山岳越えのシルクロード**が存在した。

そのルートは、四川省から金沙江を経由し、サルウイン川沿いにビルマへ、ビルマから海路インドへ至るもの。

前漢の第七代武帝（在位BC140～BC87年）の時に山岳越えの南路を確保する為、山岳地帯の倭人の国々を滅ぼした。最後に雲南省の昆明国、テン国を、熾烈な戦いの末に滅ぼした。然し、勝利はなく、ルートの確保は確保できず、13世紀まで倭人国家との戦乱が続いた。

• 長江の最上流は、横断山脈を経由して、南のラオスカンボジアベトナム、ビルマからインドまでの交流が行われていた。稲作の新技术を持った倭人がインドで水田耕作を始めていたと推定。BC2千年からBC1千年頃に移動が行われていても、遺跡の時期から考えて無理はない。（詳細は未説明）

## 2 - 長江上流からインドへの路



## 2 - いつ滅んだのか？

### 下流地域

― B C 5世紀「呉」が滅亡、

― B C 3世紀・秦の全中国統一後、漢代に滅亡

### 中流地域

― B C 3世紀「楚」が秦の中国統一時の滅亡

### 上流地域：

― 蜀は秦にB C 5世紀に統合され、

― 全国統一時には秦に編入され有力な外人部隊と一つとなっていた。

### 最上流地域

― 辺境の地で、秦の時代の後、前漢、後漢の時代に（シルクロードのバイパス確保の目的の）侵略の末に滅んだ。

― 国としては滅亡下が、ゲリラ活動を継続し、インドへのルートは、漢に渡さなかった。

### 長江文明を保った地域は

― 長江（揚子江）の河口から北遼東半島の付け根までの地帯＝徐州が秦統一後まで。

― 最上流の横断山脈で、辺境地域として残存。

・ 長江文明は中国統一の過程で滅び、秦の統一時にはかろうじて徐州に船舶漁労と水田農耕技術を保った。

・ その他の地域は戦いに敗れ、全て滅亡し、黄河文明に飲みこまれた。

### 3 - 秦の始皇帝（徐福を用いた人）

- B C 8世紀から、春秋時代、戦国時代を戦い抜き、中国全土の統一を果たした。
- 倭人の国々はこの統一の過程で、崩壊し、一部は秦に組みこまれた。

蜀（倭人を含む）の軍隊は優秀な外人部隊の一つだったという。

- 戦い抜いた秦の軍備、文明はどんなものだったかを知ることが、秦の始皇帝の墓稜の兵馬俑などに見ることができる。
- 武器

弩（形は弓だが引金と照準を備えた強力な武器）

弓、投石器、剣、矛、戈、など

帯甲は有るが、兜は被らない。

兵馬俑に残された武器は、青銅製が主だが、函谷関所の始皇帝の武器庫からは、大量の鉄製武器が発掘。統一時の実戦に使われたのは、鉄製武器。

始皇帝の統一後に行った大事業

- 万里の長城の建設
- 阿房宮の建設
- 始皇帝稜建設と兵馬俑
- 徐福を東方海上へ派遣

・ 秦の始皇帝は不老不死の秘薬を求め、道士を各地に派遣。

秘薬を持ちかえった道士は無い。

東方海上に向かった徐福のみ戻り、仙人との約束を伝えた。「童男童女3千人」「五穀の種」「百工」と交換に秘薬を渡す。

始皇帝二八年（BC219年）徐福を東方に派遣。（司馬遷の記述した史記に記録）

・ 徐福（伝説から史実へ）

出生地が徐州、徐阜村と確認された。今は内陸に入っているが、当時は湾に面し、黄河と揚子江の中間点の水運の要衝。

製薬の道具「石薬研」や、造船所跡、造船用木材などの遺物が発掘され史実と判明。

・ 徐福の装備 秦の最強の軍備を整えた水軍

帰らなかった徐福の一行を秦の始皇帝は「巨万」を費して未だに薬を持って帰らないと嘆くほどの財産を費やした装備。

艦船（発掘された同時期の船は、長さ30m、巾8m、積載量60t、百人のり。）、（秦と漢の時代、水軍の主力は楼船でした。楼船とは、一種の船上に楼を建てた高さが十余丈に達する大型の戦船）

武器は、弩、弓、投石器、剣、矛、戈、など青銅製、鉄製の武器

徐福の一族、地域の船乗り、漁師、農民が同行。

・ 徐福一行は

東方海上へ出立したが、「平原広沢の王」となり、戻らずと記録された。

徐福が戻らず、始皇帝はこの地域（徐州）を弾圧。

甕棺の墓は、この時期を境に、無くなった。

・ 徐福は、秦の始皇帝の費用で、最強の軍備を調べ、滅び行く長江文明を担った倭人達（童男童女3千人）を引き連れ、農業、工業の最新技術の十分な準備をして、新天地、東方海上に去った。

### 3 - 徐福の伝説

#### 徐福一行

― 百人乗りの船、数十隻の船団に分かれて、出航し、東シナ海から黒潮に乗り、日本に向かったと云われる。

― 到着地として伝承のある地域は

- ・ 黒潮本流に乗り、九州鹿児島から四国、瀬戸内海、紀伊半島、愛知、伊豆八丈島へ
- ・ 対馬海流に乗り、佐賀、山口、京都、秋田、青森へ
- ・ 同じく対馬海流に乗り、韓国、慶尚南道南海島、济州道济州島



黒潮・対馬海流

海洋研究開発研究機構のWEBより

<http://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/earth/p2/>

徐福にとつて、最も畏れたことは、何だっただろうか？

戻らないと判った時の始皇帝の怒りと討伐の軍隊を最も恐れると想像する。様々な手段を尽したと思うが、上陸に先立ち行ったと思うことは、小船団の長に全て徐福の名を名乗らせたと想像。もし、始皇帝の追つてが、一箇所で徐福と名乗る長を捕らえる。殺戮すれば、その他の徐福達（本物も含めて）助かる可能性が高くなる。そんな手段を講じたものと想像。

韓国の南部？所では、上陸したとせず、日本へ向かったとの伝説を残す（韓国は陸続きで危険性が高いので、名を残さない方針だったのでは？）。

多数の徐福が存在した結果が、クニワに別れ、混乱を引き起こしたと想像。



- 上陸地点は、日本国内の黒潮と対馬海流の流域と韓国南部の対馬海流の流域

- 当時の原住民・日本では縄文人、その戦闘能力と意欲は？

- ┆ 武器は、石器、対人用ではなく、狩猟用。

- ┆ 戦闘経験、部族間の戦闘もなかったため、人と人が戦う戦闘経験少。

- 徐福の一行の武器は、

- ┆ 鉄器、青銅器

- ┆ 戦闘経験は、秦の中国統一の戦乱状態を勝ち残った経験あり。

- 推定される結果

- ┆ 徐福の一行は、妨げられることもなく、水田作りに適した水辺の地域に到着し、開墾し、田畑を作り、生活を開始。

- ┆ 狩猟や粟などの採取地での争いが起きても、武力で圧倒的に優位な渡来人が支配。

- ┆ 土地を支配して行く渡来人に縄文人は従い、混血が進む。

- 倭人が支配者となり、倭人の言葉が標準の言葉として使われた。縄文の言葉は失われた。

- 韓国南部の地域については、未調査で不明だが、日本と同様の事態になったと推測する。

### 3 - 稲作・水田に関して

- BC219年の徐福の時期の日本の農業について
  - ┆ 稲作に関して（DNAから見たイネの道：佐藤洋一郎氏の書籍より）
    - 縄文後期以前（約六千年前）より焼畑や、「原始的天水田」で、熱帯ジャポニカ米の耕作が始まっている。
    - 温帯ジャポニカ米の一部は朝鮮半島経由の経路がある。
    - SSR多型の研究から、朝鮮半島を経由せず、直接中国から日本へ来た経路が設定できる。
    - 水田は、急速に北進している。この急進を可能にした条件は、縄文時代から存在した、熱帯ジャポニカ米と温帯ジャポニカ米の自然交配。交配の第二世代には20%の早生が出現し、日本列島を北方に駆け上がる可能が出る。

・ 徐福一行は暖流に乗り、各地に到着し、新技術と五穀の種により、水田耕作を始め、武力で圧倒した縄文人と混血を重ね、温帯ジャポニカ米も縄文人の熱帯ジャポニカ米と交配が進み、日本と韓国の南の地に最適な水田耕作を行い、豊富な食料を得て、人口の爆発的拡大が起ったと推定する。

### 3 - 徐福上陸 そして300～400年後

・ 水田耕作の新農業技術と、秦の始皇帝の圧倒的に優れた鉄製の武器を持った倭人達は、豊富な食料を得て、温暖で快適な地で、人口を急速に爆発的に拡大していったと推定する。

・ 長江文明⇨倭人の文化・言語が、黒潮・対馬海流の沿岸から日本各地に急速に広がった。

・ 南船北馬の船舶を操った倭人達は、日本各地、韓国南部とも交流し、中国本土の情報も入手していたものと推定。

― 漢の時代に、使節を送るもの百ヶ国と記録されるほど、情報と人員の交流があつたと推定。(後漢書・魏誌倭人伝)

― 弥生中期から後期の土器に船の線刻画があり、これを復元すると、36本の櫂と中央に帆柱長さ25mの船で、船員だけでも37人乗りのゴンドラ型外洋船

― AD八世紀の記紀の記録に、長さ十丈(30m)の船の記録あり、常陸風土記には、長さ十五丈(45m)の船の記録が残されている。

・ 人口の爆発は、

― 耕作地の取り合い

― 最強の武器を持ったもの同士の熾烈な戦いを生んだものと推測する。

― 吉野ヶ里遺跡の、異常な堀と柵で蔽った群落。首のない多数の遺骸。

― 魏誌倭人伝に記録される、国々乱れ相戦う状況が発生したものと推定。

・ 上陸した倭人達は新天地でのびのびと水田耕作と豊かな暮らしを始めた。

・ 支配階級となった倭人の言語が、日本の統一言語となった。

・ 高床の住居 鳥居を建造、布を織り、青銅 鉄の農工具を作った。

・ クニに分かれ、船舶を操り、韓国南部や、中国本土にも朝獻した。

・ 人口の爆発的急増に伴い、戦乱状態に陥った。

### 3 - 倭人と言語の伝播と残存地域



## 4 - 試論・日本人の起源・まとめ

- 長江（揚子江）の流域で稲の水田耕作農業を確立した倭人は、長江の流域とその近接地域にその領域を広げた。
- その一部は、長江の上流域、最上流地域に広がり、
  - ┆ 更に横断山脈の150Kmの狭い領域を流れる長江（金沙江）、メコン河、タールウィン川、エイヤワディ川、ブラマプトラ川の源流地帯から、ベトナム・タイ・ミャンマー・インドに下りた。
  - ┆ インドでは、水田に適したブラマプトラ川・インダス川の流域からアーリア人に追われ、南下し、最南端とスリランカの一部で、民族と分化・言語を残した。
- 秦の始皇帝による中国統一により倭人の国は、ほぼ壊滅に陥った。
- 徐福とその一行、
  - ┆ 長江下流域北、徐州の徐福は秦の始皇帝に語らい、不老不死の秘薬を持ち帰るためと称し、倭人の若者・子供3000人と五穀、農業技術者、工人、軍隊を引き連れ、船群を率い、出帆した。BC219年
  - ┆ 黒潮に沿って、九州各地、瀬戸内海沿岸各地、太平洋沿岸・高知、和歌山、愛知、静岡、神奈川、日本海側・京都、秋田、青森、更に韓国南部・海南島、済州島などに分かれて到着。
  - ┆ その地にいた縄文人を圧倒し支配した。中国統一を果した秦の始皇帝軍の、最強の武器（青銅製・鉄製）を持った戦闘経験豊かな倭人と、二世代前の「石器」を使用していた縄文人では戦いにもならなかったのではと想像する。
  - ┆ 水田を開き、稲作を行い、その豊かな収穫で、爆発的に人口を増やし、その領土、領域を広げた。
  - ┆ 倭人の言語が日本の標準言語となった。（縄文の言葉は駆逐された。）
- 200年〜300年経ち、土地を争い、クニとクニの戦いを続けた。
- AC238年卑弥呼が使節を「魏」に送るまでに至る。
- 日本人の起源は、縄文人と長江から渡来した倭人、徐福の一行。
  - ┆ 倭人が縄文人と混血し弥生人となり、現代につながる。
  - ┆ 倭人の使っていた言語が日本語となった。
  - ┆ 倭人の文明・文化が日本人・日本文明となった。
- 徐福一行の一部は韓国南部で、同様に支配を行い、馬韓・弁韓・辰韓のちの百済・伽耶・任那となり、日本列島の倭人と協力関係を保った。
- インド大陸のタミル人は、日本人と同じ倭人の末裔で、同じ起源の言語と文明を担う。

## 4 - 日本歴史に残る疑問の解消

邪馬台国・大和朝廷初期の史実で。解釈が難しかったことはいくつかが明瞭になる。

何故、突然に、縄文時代から弥生時代へ移行したか？

倭人が秦の最先端の武器と技術を持って、大挙して黒潮沿いの地域上陸し、席捲したと理解すると、

魏誌倭人伝に記されている倭人の風習・漁獵・刺青・鯨面など特徴が一致することや、

吉野ヶ里などの遺跡に見られる高床式建造物・鳥居・甕棺、青銅器、鉄器、稲作など長江文明を担った倭人の特徴と合致する理由が明白。

島国の日本の小さなクニが、百ヶ国も漢に使節を送っていたのが不思議であった。

島国の住人が、遠い海のかなたの、別世界の処（中国や韓国）に、危険を冒して、渡海する意欲と理由が解らなかった。しかし、中国から来た渡来人ならば、中国の存在を認知しており、使節を送る意欲が理解できる。

百済・加羅（伽耶）と日本との連携が疑問だった。

百済が何故、日本に支援を求めたか、日本がそれに答えて、危険な渡海をし、数万の兵士を送り、戦争を行った。その理由は何だったのか。危険を冒して、海を渡る理由がない。しかし、同じ、徐福の一行の倭人同士（仲間）の依頼ならば、援助に行く理由と名目には納得が行く。

韓国に日本語と倭人の風習が残らなかった理由

中国本土で、倭人の言葉も長江文明も残らなかったと同じ理由。戦いに負けた民族の文明や言語は残らない。かろうじて、単語レベルで稲作や農作業に関連する言葉が、400語程が残ったことは、大野晋さんの「日本語の起源」で明示されている。

## 参考文献

- 岩波書店 岩波新書 大野晋著 「日本語の起源」 1994年6月発行
- 中央公論新社 中公新書 鳥越憲三郎著 「古代中国と倭族黄河・長江文明を検証する」 2000年1月発行
- 新潮社 新潮選書 今泉恂之介著 「兵馬俑と始皇帝」 1995年11月発行
- 帝国書院 図説 「ユニバーサル新世界史資料」 五訂版 2004年3月発行
- 作品社 史話 日本の古代 第一巻 植原和郎編 「日本人はどこから来たか 日本文化の深層」 2003年8月発行
- | DNAからみたイネの道 佐藤洋一郎著
- | 徐福は日本へ来たか 茂在寅男著
- 新典社 新典社選書14 達志保著 「徐福論 いまを生きる伝説」 2004年6月発行
- 海洋研究開発研究機構のWEBサイト  
<http://www.jamstec.go.jp/jamstec-1/earth/p2>
- 財団法人公園緑地管理財団 吉野ヶ里久尾園管理センター発行のパンフレット 「弥生の里 吉野ヶ里」 2005年2月購入